

1 児童生徒の学びをサポートするICT活用

(1) 主体的な学び

こんな実践

子どもたちの目、あるいは意識を、学校のまわりへと広げる場面。学校が立つ、自分たちが暮らす市（町村）へと意識を向け、市（町村）の様子に興味を抱くために導入場면을工夫した実践です。

実践学校 C小学校

実践学年 3学年

実践時期 6月上旬

単元・題材名 「わたしたちの市」

学習指導要領との関連：(1) 身近な地域や市町村の様子

- 自分たちの通う学校は何市にあるのか問うと、「B市！」と多くの子がつぶやき、先生は、「今から市の様子を見てみよう」と問いかけ、画面を見るように促します。その地図アプリには、クルクルと回転する地球があり、画面がズームされるにつれ、日本の形が見え始めます。さらに日本の中央部がズームされ、長野県、B市と、徐々に自分たちが暮らす市の様子が見え始めるころには、子どもたちの体は前かがみになり、椅子からおしりが浮いている子まで現れました。そして、「あっ。僕がよく行くスーパーだ」と、空から見る町の様子の中にある、自分の身近なお店を発見しました。



ここがポイント！

- ・子どもたちの意識を学校の周りから市へと広げるための1つの手立てとして、地図アプリを活用しました。
- ・地球から徐々にズームさせ、その時その時に発せられる子どもの気付き（つぶやき）を拾い、操作する先生もわくわくしながら、一緒に画像を見つめました。

○ その後、カラー印刷された「B市の鳥瞰図」がグループごとに配られます。そして、「空から見たB市の写真を見て、気付いたことを話し合おう」を学習課題に、B市の様々な様子に気付いていきます。「B市の鳥瞰図」がグループごとに一枚だったので、自然と気付いたことを伝え合い、「家が多い」「川が流れている」など、お互いの発見を共有していきました。



○ 「緑がたくさんあるけど、これって何かな」「緑は山(森)なんじゃないか」グループの仲間だけでは判断できない時には、子どもたちは地図を片手に先生のところへ向かいます。そして、判断できないことを伝えると、先生は、「そっかあ、はっきり分からないか。だったら、もう1回画面で確認してみよう」と伝え、地図アプリで子どもたちが見つめている場所をズームしていきます。そして、緑色が木であることが分かると、「やっぱり山(森)だったね」と、ほくほく顔で自分の席へと向かっていきました。



ここがポイント!

- ・グループごとに「B市の鳥瞰図」を1枚配布することで、子どもたちは自然と関わり合い、会話を弾ませながら、B市の特徴をつかんでいきました。
- ・ICT機器を活用した地図アプリのデジタルな情報と、手持ち資料としての写真を印刷した資料のアナログな情報の2つの情報を活用することで、B市の特徴を深くつかむことができました。

まとめ

手元にある「B市の鳥瞰図」を軸にしつつ、導入場面と紙ベースの資料では分かりきれない部分を、地図アプリを活用することにより補い、授業の冒頭で湧いた「B市のことをもっと知りたい」という主体的な学びを持続させることにつながります。